

我が青春の、中学野球部

岡本 悠

学校は、野球の為と、言ったら、叱られた

石橋にとって、学校は面白い場所ではなかった

この中学に入った動機も、中高一貫であり、昔、高校が甲子園に出場していたからだった

面接で、おじさんの先生が笑う「そんなの昔の話だよ」

もう一人の先生が「まあ、いいじゃないですか」と言った

俺が、受験で合格できたのも、問題が、たまたま、野球に関する内容だったからであった

軟式の野球チーム、すでに、3年生の先輩がいて、2年生の先輩がいて、我々1年生がいた

壁に向かってボールを投げて、それをグローブで掴む

それを、順番にやるのだが、

1人の男が上手かった

俺は、「おう、おう」と、反応した

のちのち、この男は、エースになるのだが、「お前、なんか反応していたな」と、言われた

3年生が卒業して、2チームになった

我々の年代からは、飛び級でレギュラーになれる存在はいなかった

先輩たちの試合の日、俺は一塁の審判を任せられた

しかし、我が先輩たちのチームに有利なジャッジをしたせいで、相手の選手は怒り、脅された、俺は、自分に正直にジャッジしたのだが...

1人の先輩は「自信をもっていいよ」と、声をかけてくれた

先輩たちも、お別れの頃、俺は、遅刻を恐れて、試合に応援に行くのをさぼった

すると、我々のチームの年代が、選ばれて、試合に加わっていた

のちにエースになる男は、「お前もくればよかったのにな」と、皮肉を言った

先輩たちが卒業して、我々年代が、中心のチームになった

監督が、皆を集めて、ミーティングをした

その席で、俺は、副キャプテンに指名された

これには、驚いた

監督も、見ていてくれたのか、と思った

俺は、守備が好きだった

ファーストを守るようになり

監督からは、特別にファーストミットを渡された

晴れて、俺は、5番ファーストというポジションが定着した

練習の帰りは、仲間たちと自転車で、駄菓子屋に行った

そして、セブンイレブンで、おでんを食べた

エースは、コントロールがよく、カーブもよく曲がった

俺たちのチームは、守りの野球のチームだった

まあ、エース1人に頼り切りだったとも言えるが

まったく打てない、得点が取れないチームだった

でも、全体的に守備は堅かった

ある日は、父親や母親が、試合を見に来てくれた

父は、ビデオで、試合を映してくれた

そこには、1本の俺のセンター前ヒットと

その出塁後の、盗塁失敗が映っていた

円陣では、外側のほうに俺がいて、適当に聴いていた

俺は、国語の居残り勉強の日

ユニホーム姿で、授業に出ようとしたら

その教師に注意された

都大会に出場した時

俺は、あとアウト1つで勝利というところで

ファーストへのファウルフライを落とした

そして、チームはそのあと、逆転負けをされた

俺は、キャッチャーの男から

「あの時、取ってればな」

と、言われた

悔しくて、泣きそうになった

野球合宿のあいだは、ずっと雨だった

だから、練習はほとんどなかった

巨人の開幕戦と重なっていたので、

監督ではなく、顧問の先生に

食事中、巨人戦が見たいんですけど、と云った

すると、松井秀喜がいた

松井はホームランを打った

俺が、「ウウオー！」と、大声を上げると

男は、「おい、それは違う」と、言われた

ある試合で、俺は、バッテリーボックスにいた

振りぬいたあたりは

バットの先端に「ジンッ！」と当たって

一塁線を抜けていった

サヨナラヒットである

俺は、心の中で喜んだが

なぜか、態度には表さなかった

つまらなそうな顔をしてしまった

また、ある時は、劣勢の中で

また詰まったあたりがレフトの頭上を超えて

2塁打を放ち、同点に追いついた

俺は、嬉しかった

そんな3本のヒットしか、憶えていない

俺は、テレビを見ていたら、

巨人の江藤智が、

顔面に打球を受け

目を傷めた

それを見て、俺は、ボール恐怖症になってしまった

練習をしても、ゴロをさばく時

顔が逃げてしまう

重症だった

ある時、キャッチャーの男が、

練習中に

「副キャプテンなんだから、後輩にもっとちゃんと注意しろよ！」

と、言われた

癩にさわったので、無視してしまったが

それを見た監督が

「なんで、注意しないんだよ！」

と云った

俺は、しぶしぶ、「1年、しっかりやれよ！」と云ったが

誰も、聴いていなかった

監督は、大会の抽選に、キャプテンと副キャプテンの俺ではなく、

キャプテンと、エースで、抽選に行かせた

俺は、傷ついたが、楽だった

試合、最後の時、

メンバー表には、俺は、5番ファーストではなく

6番ファーストになっていた

もちろん、1年生の未来を見据えての理由だが

俺は、プライドが...

そして、その1年生の前で

「なんで、俺が、6番なんだよ」

と、愚痴った



チーム全員で、記念写真を撮ることになった

俺は、左端で、帽子を深くかぶり

暗い顔で映っている

のちのち、俺は、この額縁を捨てようとしたが

母はゴミ箱から取り出していた

それが、何回か続いた

どっちでもよかった

ミーティングの際、

監督がジョークで、俺のことを馬鹿にした

俺は笑わなかった

真顔のまま、それを聴いていた

皆は、笑っていた

俺は、高校でも野球をやろうか悩んだ

ボールを受けるイップスもあったし

なにせ、硬球という堅いボールが怖かった

一度、試しにサードでノックを受けたが

足に当たり動けなくなった

ジ・エンド

俺は、高校野球部に行くのはやめた

もう、自信がなかった

白虎隊だけは嫌だった

相変わらず、学校の成績は落ちこぼれだった

野球の為にいていたから

野球がなくなって、目的を失った

次第に、学校に行かなくなった

そして、高校1年生が終わったあと

学校を辞めた

10年後エースに誘われて、待ち合わせした

エースは遅れてやってきた

キャッチボールをして、俺に強い球を投げた

それが、最後の中学野球部だった...

「完」